NY エッセイ 108

中瀬有紀

2019年の終わりに

『サン・ルイ・レイの橋』マイアミ・ニュー・ドラマにて

ニューヨークの秋は毎年あっという間に過ぎてゆき、気がつけば冬です。9月後半から始まった紅葉は10月中旬に見頃を迎え、11月上旬の初雪と氷点下がすべての落葉樹の葉を落とします。今年も、一夜で10度以上気温が下がったのは10月下旬でした。1日前までは袖なしのドレスにハイヒールのサンダルでストリートを闊歩していたニューヨークの女性たちも、次の日はダウンコートとシープスキンのブーツに衣替えです。日本同様、文化の秋はさまざまな興行をもたらします。この秋は、オフ・ブロードウェイやリージョナル・シアターの劇場シーズン、ダンス公演、コスメティックブランドのメークアップ・ワークショップ、ジュエリーブランドのガラなど、さまざまな照明業務に参加させていただいたことをとても光栄に思います。

舞台照明とイベント照明のどちらか一方を選んで活動する照明家やデザイナーも多いですが、私は人間の目もしくは人間の目とカメラの両方に対応する明かりつくりである限り、どんな業種でも同じだけのエネルギーをつぎ込んで精一杯取り組んでいます。明かり一灯一灯に意味がある演劇の照明も、出演者と会場の雰囲気を主催者の好みに応じて綺麗に魅せることに焦点を絞ったイベントの照明も、それぞれに違う難しさがあり、どちらも照明チーム一丸となって目標を達成したときの喜びが生きがいになっています。どの業種にも共通するのは、予算内に仕事を納めることもしくは求められることに対応するための予算の交渉が、良いデザインと同様に照明デザイナーに求められる重要な役割の一つです。仕事によって照明予算には大きな差がありますが、どの仕事にも決まって予算の上限があり、その予算を最大限有効に使ったデザインの合意に至るまで、何度もプランを書き換えます。初めから複数プランを提示し、多いときには最終案に至るまでに10プラン以上の改定を求められます。

改定を繰り返す過程では、素早い対応と見落としのない正確な改定案の提示が不可欠です。今日の夕方にプランの変更があり明日の朝までに改定図面の提出を求められるとき、一番頭を悩ませるのはコンピューターのプロセッサーの速度です。照明図面のほぼすべてを3Dで制作する近年の仕事スタイルでは、なるべく早い速度で働いてくれるコンピューターが必須です。最近関わった1600平米のフロア面積で天井までの高さが35メートルほどの会場の3D図面では、断面図やカメラ・ビューをコンピューターがレンダーするのに64GBメモリのデスクトップPCで約20分、8GBのマックブックプロでは約1時間かかり、待つだけで疲れ果てます。約3年に一度は手持ちのコンピューターの見直しが必要で、仕事道具もすべて自分もちのフリーランサーとしては頭を悩まされます。

6年前に照明オペレーターとして働き始め、4年ほど前から照明デザインのアシスタントを務めさせてもらっているイベント照明会社から、今年の秋に初めて小さな催し物の照明デザインを任されました。会社の社長から「Living the dream! Only the beginning, Yuki!!」と送り出された一言は、演劇とイベントの仕事を股にかけ飛び回り続けて少し疲れていた私に、初心を思い出させてくれました。照明という仕事を通じて社会と関わっていることを実感し、照明がなければ身一つで渡ったアメリカでこれだけ充実した毎日は送れていなかったと思います。日本から常々私を支えてくれている家族と先輩、またアメリカで照明を通じて出会った戦友たちに感謝の気持ちでいっぱいです。

今年もこのニューヨーク・エッセイを通じて日本の照明家の皆様との関わりをもてたことを、とてもうれしく感じています。どうもありがとうございました。2020年は東京オリンピックをはじめ日本が世界から注目を浴びる1年となるでしょう。皆様が照らす美しい日本を、海の向こうから拝見することを心待ちにしています。良いお年をお迎えください。